

以下部鳴鶴 啓蒙 書家、漢詩人。天保九年八月十八日江戸（彦根藩邸）生れ、大正十一年一月二十七日歿（八三―一九三）。本名東作、字子煬、幼名八十八、三郎、通稱内記。別號八稜視齋、喜鶴、孟秩、白下東作、白下鳴雀、殘叟、東嶼、清閑堂、玉蘭軒、翠雨山樵、老鶴、野鶴、鳴雀、鳴雀仙史、鳴雀東作、鳴雀翁、鳴鶴仙史、鶴叟、鶴廬、鶴翁等。彦根藩士田中惣右衛門次男、安政六年同藩士白下部二郎右衛門の嫡養子となる。少時巻菱湖の書を習ふ。明治二年大政官大書記、二條實美、大久保利通の知遇を得る。平河町に居住、隣家の巖谷一六と白夕往来、七年一六の第一子を以て養嗣子とした。十二年官を辭して書家として立つ。翌年來朝して楊守敬から金石學を學び、楊の携へ來た碑版一萬餘の目錄を作製、おの六朝書道を研鑽。二十四年渡清して餘曲園、吳昌碩、吳大澂等と交流。四十二年勅命により大久保神道碑を書く。大正六年大同書會が創設せられ會頭に就任、機關誌『書藝』を創刊した。漢詩人としては森春濤の茉莉吟社詩會に参加し、岡本黃石と親交。門下の近藤雪村、萩野由之、丹羽海鶴、渡邊沙鷗、吉田待行等。畫も能くした。

著書の『鳴雀仙史草書千文』（明治十七年十一月松根武八・神原友吉出版、大坂・松村九兵衛發兌。復刊『草書千字文』改刻・昭和二年五月十日大阪・田中大右衛門刊）、『行書千字文』（明治二十七年十月二十五日大阪・田中宋榮堂）、『論書二十卷』（明治二十四年六月二十五日石叢堂、吉川半七刊）、『鳴鶴先生學書經歷談』（一六居士評内題「學書經歷談」大正五年十一月二十五日清水書店）、『三體習字帖』（書道及畫道社編、大正七年十月十五日一松堂書店）、『鳴鶴先

『注詩稿』(田中成軒編、昭和六年十一月十五日歎堂書房)、田原隆先生
 撰『字章』全六冊(比田井鴻編、昭和七年九月二十日書院院後援會)、
 『漢字字文』(昭和二十六年一月十五日京夏・共進書房)等。中由
 漢語學會刊『漢語字文』(昭和五十九年十一月二十日木耳社)がある。

